



TITLE:

枝幸圖書館の由來 (日食特輯號)

AUTHOR(S):

---

CITATION:

枝幸圖書館の由來 (日食特輯號). 天界 1936, 16(182): 318-322

ISSUE DATE:

1936-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167239>

RIGHT:

## 枝幸圖書館の由來

### (一)

枝幸村の郊外、翠滴る山を背景にして、創立40年の歴史を持つ小學校の古びた校舎が建てられています。

その校舎の正門の直ぐ前に道路を隔て、<sup>1</sup>「公立枝幸圖書館」<sup>2</sup>といふ看板を掲げた洋風の建物があります。

片田舎の小さな村に堂々たる圖書館が建てられてあることが既に世にも珍しいことであるのに、大都市の圖書館に比しても劣らない程、多くの洋書冊数を藏してゐるといふ事は、何人の心にも一種奇異の感を抱かせずにはおきません。どうしてこの夥しい洋書を有つところの圖書館が、我が枝幸村に生れたのか——その由來を明かにするには米國の天文學者トツド博士の、世にも美はしい偉大なる事蹟を物語らなければなりません。

### (二)

話は遠く今から40年の昔に溯ります。

日清戦争のすんだ次の年の明治29年、その年の8月中に太陽が皆既食になるといふ、誠に珍しい現象が起りました。このことは當時の世界の人々の非常に興味をよび起しましたが、殊に天文學者にとつては、太陽觀測に又とない機會なので、各國の學者達は周到な用意のもとに觀測隊を派遣すべき地點の選定にとりかゝつたのですが、その結果、我が枝幸村(當時戸數2百戸足らず)がこの觀測地點として最も適してゐる所であるといふことになりました。このことは村人達にとつて、降つて湧いたやうな驚きと喜びとの知らせでありました。

「皆がくれのお日様を見る爲に澤山の外國人がやつて來るやうだ。軍艦に乗つて來るところもあるといふから大へんな騒ぎだわい。」<sup>3</sup>

「村始まつての出來事だ。忙しいことになるぞ」<sup>4</sup>

噂は噂を生んで廣くもない隅々にまで擴つてゆきました。村人達はよりより集つては觀測隊歓迎の準備にとりかゝつたのでした。

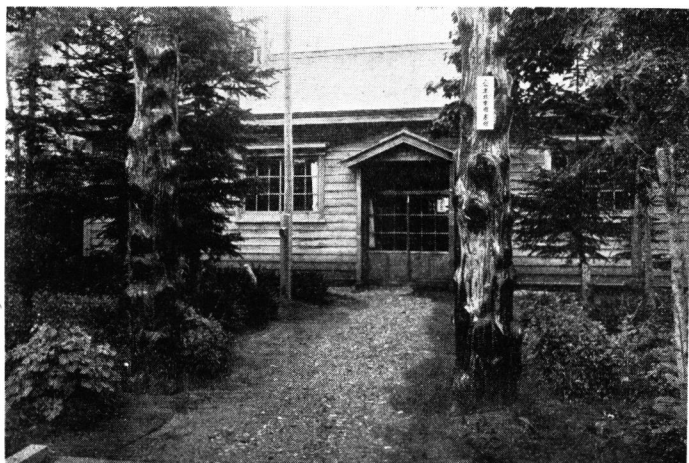
やがて北見の海にも夏らしい風が吹いて、はまなすが蝦夷の濱邊に可憐な

花を見せる7月も終りに近い頃、待ち焦がれて居た噂が事實として村人達の前に現はれました。

我が國を始めとして英・米・佛・獨の觀測隊の一行が、續々としてこの一漁村へやつて來たのです。

村の人々は濱邊に走り出て、好奇の眼を睜りながらこの遠來の珍客を迎へました。

異様な外國人が隊を組んで堂々と小さな村中を濶歩する。言葉が通じない爲到る所に喜劇が生れるといふ有様。外人との取引が始まる。澤山の人が入り込んで來るといふ譯で、村全體が上を下への大騒ぎです。



公立枝幸圖書館

外人達の何かの祝ひの日に、全員が浴衣がけて胸に花をかざして村中を練り廻るといふので、村の呉服店の晒布といふ晒布がすつかり賣り切れて了つた。安つばい花簪の類まで羽の生えたやうに賣れて了つたといふことが、今でも年寄の一つ話に残つて居ます。

小さな村が煮え返るやうなこの騒ぎの中で、醇朴な村人達は心からこの珍客を歡待しました。

中でもアメリカとフランスの一行は、殆ど全部が上陸して村の郊外に組立式の珍奇な家屋(その一部分が今でも残つてゐる)を急造したり、或は天幕を

張つたりして、簡易な生活を營んで居つたので、村人達との交情も非常に親密なものがありました。

トツド博士は此のアメリカ觀測隊の隊長として來村せられたのです。

### (三)

日食觀測に取りかゝつたのは8月10日の午後からですが、その翌々日の12日、枝幸村は又一つの喜びを重ねました、それは、かねて新築中であつた枝幸小學校の校舎が落成したので、その開校式を舉行したのです。當日はかねて來村中の40名からの、内外人が來賓として席に列し極めて盛大な式典が舉げられました。

トツド博士は、こんな片田舎の地にもかうした立派な小學校が建てられたといふことに深く感動されて、次のやうなことを人々に語られました、  
「日本が清といふ大國を相手として堂々と戦ひ、しかも大勝を博したことが決して偶然でないといふことを知りました。それは國民教育が普及してゐるからだといふことであります。僻陬のこの地に、今日かくの如き立派な學校が建てられたといふ事實はこのことを物語るものでなくてなんでありませう。

緣故深い枝幸の土地とこの小學校とは、恐らく自分の一生を通して忘れられない思ひ出となることでせう。自分も此の土地に對して何か記念のしるしを遺し度いものですと」博士の心の中には深く期するところの或るものがこの時既に宿つてゐたのです。

北見の夏は早い。朝夕秋冷を覽える9月に入つて觀測の一行はそろそろ歸國し始めました。

「サヤウナラ」 「サヤウナラ」

人なつつこい眼をした外人達が、危つかしい日本語で別れを惜しみながら船に引上げました。

村の人々も大勢濱に出て名残を惜しましました。

ことにトツド博士は、村人達の示してくれた純情と好意とに對して深く深く感謝し、

「永い間いろいろと世話になりました」

村の方々が心から私共をお世話して下さつた厚い情は、心の中に深く刻ま

れてゐます。枝幸の人と自然は私にとつて終生忘れられない思ひ出となるでせう。

歸國した上で私の感謝のしるしに何かお送りし度いと思つてゐます。ではお達者で。——」

やさしい兩眼をうるませながらこの一言を残して別れを告げ、本國に歸られました。

#### (四)

淋しい土地に様々な追憶の種子を蒔いて外人達は歸つてしまひました。やがて冬が來ました。炬燵やストーブを圍む村人達の話題に上るものは過ぎし日の思ひ出話でした。

慌しかつたその年も暮れて、新しい年を迎へた正月15日、雪に埋れた村の學校に一つの大きな荷物が送り届けられました。差出人はアメリカのトツド博士となつてゐます。

人々の頭の中に歸國に際して残された博士の言葉が甦つて來ました。「何を送られたんだらう」

好奇の眼を寄せて包を解いて見ると、中から出たのは30冊の洋書と42冊の日本の書物でした。

「博士も氣がきかないね。讀めもしない横文字の書物を送つたりしてさ。」と囁くものの中にはありました。書物は無雜作に職員室の一隅の薄暗い中に藏められてしまひました。

翌る年又博士から前にもまして大きな荷物が送られて來ました。中には部厚の洋書がギツシリ入れられてありました。

「トツド博士から又荷物が來たさうだ」又例の横文字の本か」

村人達は笑つてゐました。厄介なものやうに薄暗い書棚の中に入れられました。その次の年も亦送られて來ました。

又其の次の年もといふやうに毎年缺かさず必ず書物が送られて來ました年によつては2回も3回も送られたこともありました。

初め一笑に附して眺めてゐた人々も、後には笑ふ所か嚴肅な心持で、博士からの贈物を取扱ふやうになつたのも無理はありません。

かうして5、6年の間に送られて來た書物(大部分洋書)が、實に千冊を越え

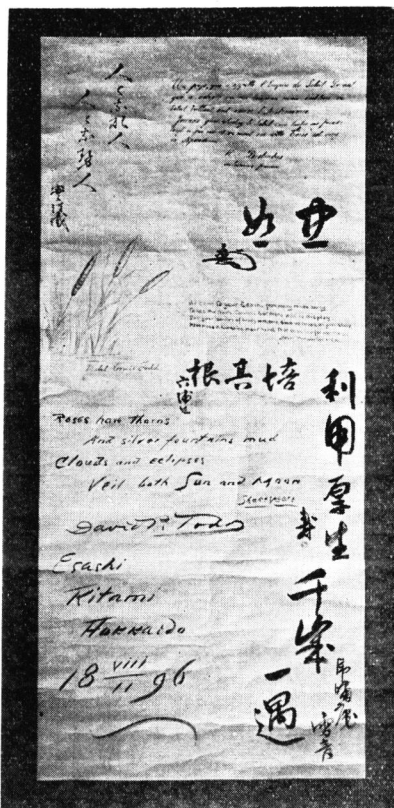
るといふ驚嘆すべき數に達したのであります。

職員室の一隅に書物がうづたかく山を成してゐる事實を見た時、村人達は初めて氣がつかしました。博士の贈物の眞意を初めて知り得たのです。そしてこの崇高なる博士の人格に齊しく胸を打れ、たこの尊き贈物の前に頭を垂れたのでした。博士の眞意からも、又此の贈物を永久に記念する上からも此の書物を基として図書館を作らうといふ事に人々の心では期せずして一致しました。そこで村の主だつた有志が奔走はして寄附金を募るやら、設立の許可を請ふやらして、遂に明治36年1月、北海道に於ける最初の公立図書館として我が枝幸図書館の發生を見たのです。

然しその當初は図書館とはいふものの僅に校舎の一室をそれに當て、書棚に入れて積んで置いたに過ぎず、それに大部分が洋書だつたために、利用する者も殆んど無かつたのですが、先年時の校長、村長、村の有志といふ人々が、トツド博士の尊い心から生れた血縁あるこの図書館が、このやうな状態にあるといふことは

誠に残念なことであり、博士に對して申譯のない話である。何とかして再興しなければならぬ、<sup>1</sup>と決意して村人達に賛同を求めたところが悉く共鳴し、日ならずして莫大な寄附金が集つたので、現在の地に館舎を新築し、新刊の書籍雑誌をどんどん購入するといふやうに甦生し、山清く氣澄める郊外閑靜の地に、研學向上に精進する人々の聖堂として仰がるゝ今日に至つたのであります。

(北海道郷土讀本卷三より)



トツド博士、寺尾臺長の寄せ書等